

延岡市文化財調査報告書 第6集

上南方地区遺跡

県営圃場整備事業上南方地区に伴う

発掘調査概要報告書

中尾原遺跡

山口遺跡

1991.3

延岡市教育委員会

序 文

この報告は、平成2年度県営圃場整備事業上南方地区に伴い、国県補助と東臼杵農林振興局の委託を受けて、市内細見町に所在する中尾原遺跡、市内小川町に所在する山口遺跡の発掘調査を実施し、記録にしたものです。

発掘調査によって、宮崎県北部では最大規模の弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡49軒をはじめ、土埴78基、五輪塔3基などが発見され多くの成果を得ることができました。これらの資料が延岡の古代史解明の糸口になるものと期待されます。

本書が、学術研究の資料として、また文化財保護の一助として活用されることを願う次第です。

最後になりましたが、発掘調査にあたって、宮崎県教育庁文化課、東臼杵農林振興局、上南方地区土地改良組合、地権者の方々など関係者各位のご理解とご協力に対し心からお礼申し上げます。

平成 3 年 3 月

延岡市教育委員会

教育長 松 坂 数 男

例 言

1. 本書は、県営圃場整備事業上南方地区に伴い、延岡市教育委員会が事前に発掘調査を実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、平成2年6月5日から平成3年3月2日まで実施した。
3. 発掘調査については、中尾原遺跡を山田聡が担当し、山口遺跡を県文化課谷口武範氏が担当した。
4. 遺物の実測、トレース、図面の作成については、それぞれが担当し、大塚徳子氏、甲斐佳代氏、高橋京子氏の協力を得た。
5. 本書の執筆は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを山田が、Ⅳを谷口氏が担当し、編集は山田があたった。
6. 出土遺物は、延岡市教育委員会にて保管している。

目 次

Ⅰ はじめに	1
Ⅱ 遺跡の位置と環境	3
Ⅲ 中尾原遺跡の調査	7
Ⅳ 山口遺跡の調査	12

I はじめに

調査に至る経緯

延岡市内では、小峰町、高野町、上三輪地区において県営圃場整備事業が実施されているが、上南方地区においても昭和61年度から県営圃場整備事業が開始されることになり、東臼杵農林振興局から文化財の有無について依頼を受けるに至った。

現地踏査の結果、埋蔵文化財が所在すると思われたため、平成元年7月に県文化課による試掘調査が実施され、遺跡が広範囲に所在することが明らかになった。このため、県文化課、東臼杵農林振興局、市教育委員会による埋蔵文化財の取扱いに対する協議を行った結果、埋蔵文化財遺存地区のうちで、事業実施に伴って削平される区域の発掘調査を実施して記録保存することになった。

発掘調査は、東臼杵農林振興局の委託を受け、延岡市教育委員会が平成2年6月5日から平成3年3月2日まで実施した。

調査の組織

調査主体	延岡市教育委員会
教育長	松坂 数男
社会教育課長	松島 崇
文化係長	沖米田 俊雄
庶務担当	吉永 綏子
調査員	山田 聡 谷口 武範 (県教育庁文化課主任主事)
調査指導	横山 邦維 (福岡市教育委員会)
調査協力	小野 信彦 (北方町教育委員会主事)
調査補助員	松林 豊樹 (琉球大学学生)
調査作業員	安藤登美子、甲斐カツキ、甲斐 暁、甲斐常美、片伯部充夫、工藤幸一、 工藤今朝子、工藤節子、久保利男、酒井 巖、酒井カノエ、酒井キミコ、 酒井清子、酒井初枝、酒井テル子、酒井義穂、酒井ミサコ、白石睦子、 林田裕子、牧野昭徳
資料整理	大塚徳子、甲斐佳代、高橋京子

このほか、延岡史談会、郷土史婦人学級まがたま、南方中学校1年生のご協力を得ました。



(1/50,000)

第 1 図

周辺遺跡分布図

- | | | |
|--------------|---------|---------|
| 1 中尾原遺跡 | 2 山口遺跡 | 3 山田遺跡 |
| 4 苺田窯跡 | 5 多々羅遺跡 | 6 貝の畑遺跡 |
| 7 赤木遺跡 | 8 高野貝塚 | 9 今井野遺跡 |
| ▲…………… 南方古墳群 | | |

II 遺跡の位置と環境

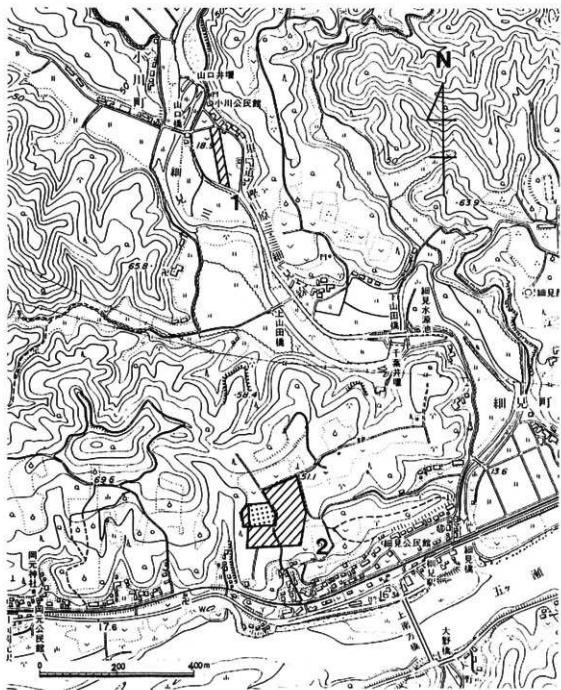
延岡市は、県内でも有数の河川である五ヶ瀬川によって南北に分断される形で開けた町である。しかし、流域には川から受ける恩恵によって古代から人々の生活の営みを示す多くの遺跡が点在している。

特に、南方地区は遺跡の宝庫と言われるほど数多くの遺跡等が確認されている。下流部から、高野町には高野貝塚（未調査）、舞野町には宮崎県を代表する旧石器時代の遺跡である赤木遺跡をはじめ、貝ノ畑遺跡（弥生時代後期後葉の竪穴住居1基）、多々羅遺跡（箱式石棺1基）、国指定南方古墳群舞野支群などが点在しており、隣接する上南方地区遺跡も、こうした遺跡群の一角にあたる。中尾原遺跡は、延岡市南方乙字中尾原（延岡市細見町）に所在する。五ヶ瀬川左岸の標高約50mの平坦で南向きの台地上に立地し、五ヶ瀬川との比高差は約35mを計る。当遺跡の東と西側にはそれぞれ南北、東西方向の谷が開析し、更に東側は五ヶ瀬川支流の細見川が南流しており、舌状台地に類似した形状になっている。また、西に隣接する岡本地区、細見川を挟んで東側においても同様の台地が広がり、石楯、打製石斧など多数の遺物が表採されていることから、当遺跡においても相当量の遺構、遺物の存在が推察される。

山口遺跡は、延岡市南方乙字山口（延岡市小川町）に所在する。中尾原遺跡の北方約1kmにある細見川左岸の沖積地に立地し、標高は約18mあり、細見川との比高差は約3mを計る。東側には、中尾原遺跡が立地する台地と同様のものが存在し、比高差は約27mを計る。付近は既に圃場整備事業が終了しているため、旧地形についての詳細は不明だが、周囲は水田で当遺跡地付近だけ畑作が行われていることから、細見川の氾濫原より微高地であった可能性があり、遺構などの存在が推察される。なお、来年度には東側の台地の発掘調査が予定されている。

<参考文献>

- 鳥居龍蔵『上代の日向延岡』鳥居人類学研究所 1935年
- 石川恒太郎『延岡市史』国書刊行会 1981年
- 延岡市教育委員会『赤木遺跡、多々羅遺跡』『延岡市文化財調査報告書Ⅲ』1987年
- 宮崎県史編纂室『宮崎県史』1989年
- 宮崎県教育委員会『貝ノ畑遺跡』『第二次日向遺跡総合調査』第二・三輯 1967年



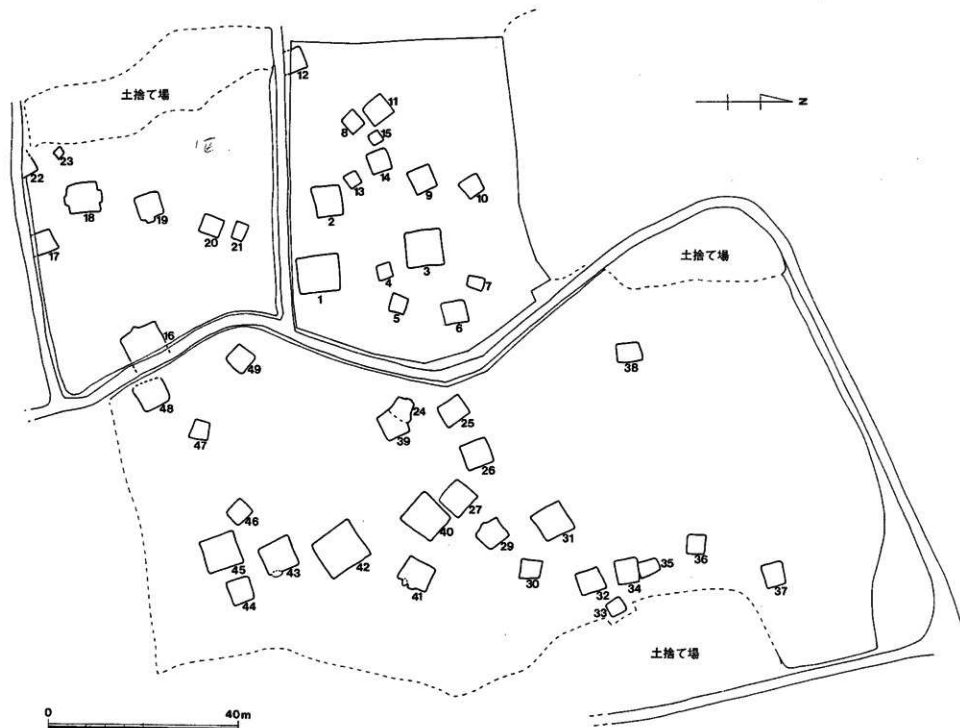
第 2 図
調査区位置図

1 山口遺跡

2 中尾原遺跡

▨ 元年度分

▨ 2年度分



第 3 図 遺構配置図 (住居跡のみ)

Ⅲ 中尾原遺跡の調査

調査の概要

中尾原遺跡は、平成元年7月の試掘調査で縄文後期から古墳時代にかけての遺構、遺物が確認され、平成2年2月から3月にかけて発掘調査を実施している。調査によって弥生後期後半から終末期に比定される隅丸方形の竪穴住居跡を15軒検出している。

今年度は隣接する15000m²について平成2年6月5日から平成3年3月2日まで発掘調査を実施した。基本層序は、第1層耕作土、第2層黒色土、第3層アカホヤ、第4層黒褐色粘質土、第5層茶褐色粘土、第6層黒茶褐色粘土、第7層ATである。まず最初に、調査面積が広大なことから約5000m²ごとに調査区を3工区に区切ってから重機による表土剥ぎ作業を開始することにした。第1工区は、元年度調査区の西側と南側、第2工区は元年度調査区の東側、第3工区は第2工区の南側にそれぞれ設定をした。

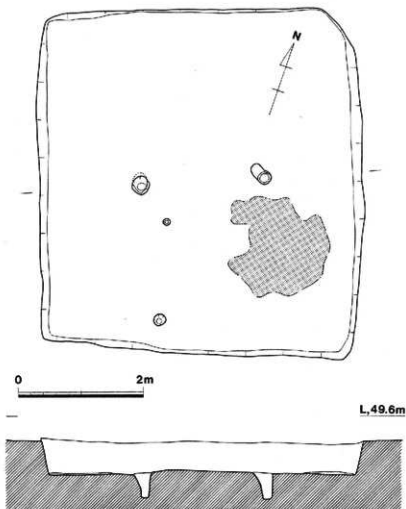
第1工区の西側は調査予定地の中では最も高位にあるが、開墾による削平がかなり進んでいるためアカホヤは全くみられず第5層が露出していた。そのため、竪穴住居遺構等の検出はみられず、第6層からナイフ形石器、剥片類が出土した。

第1工区南側、第2工区、第3工区はアカホヤがほぼ全面から確認され、縄文後期から晩期にかけての土埴78基、弥生後期後半から古墳時代初頭と6世紀代の竪穴住居跡34軒を検出した。土埴は円形、楕円形などがみられ、磨消縄文、貝殻条痕文、黒色磨研土器などが出土している。竪穴住居跡はいずれも隅丸方形もしくは方形プランを呈し、そのうち1方向ないし2方向の張りだしをもつものが5軒みられる。また、住居内施設としてベット状遺構をもつものが数軒確認されている。大きさは1辺約3mから約10mのものまでみられ、柱穴は2本ないし4本が主流であるが、10mクラスのものには8本に増える。出土遺物は、鉄斧、鉄鎌、鉄製釣り針、石包丁、上製勾玉、須恵器(環)などがある。

竪穴住居跡

第2工区南西部で検出された第25号住居跡である。規模は5×5.5mを測り、形状は方形プランを早する。検出面から床面までは約50cmを測り、床面に2本の主柱穴が認められる。柱穴は直径約20cm、深さ約40cmで、柱穴間は約2mを測る。床面は平坦で、住居内施設は検出されなかったが、南東部床面上部から多量の焼土が検出された。焼土は厚さが約10cmあって、ややレンズ状の堆積がみられ、若干の炭化物が含まれる。

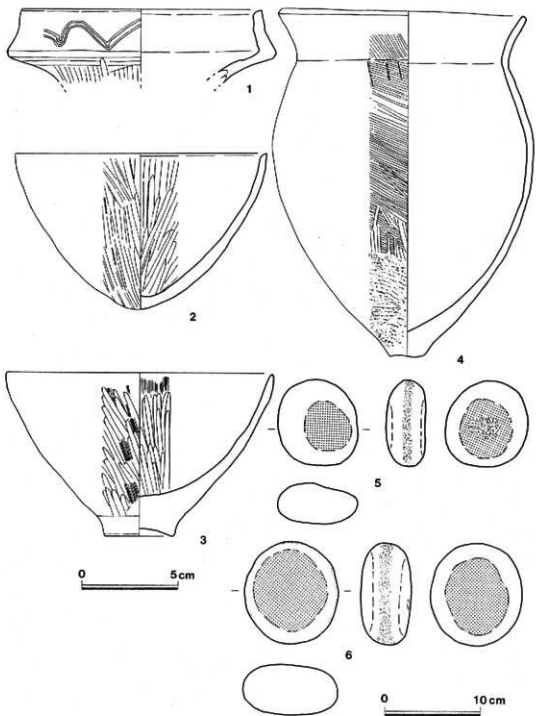
遺物は、土器が主体を占めるが、破片が殆どで完形に復元できるものはみられなかった。また、中央やや北西部の床面から55×40cm、高さ約20cm、重さ約65kgの台石(直上からは磨石)が出土している。



第 4 図 第25号 竪穴住居遺構実測図 (1/60)

出土遺物

いずれも竪穴住居跡から出土したものである。1は複合口縁壺である。口縁部は内傾し、外面には簡描波状文がみられる。口唇部から頸部にかけて入念なヘラ磨きがみられる。2と3は鉢である。2は内外面ともにヘラ磨きが施されている。3は内外面ともに刷毛目調整後ヘラ磨きがみられる。4は甕である。口縁部はやや外反し、胴部は卵形を呈しており、底部は浅い上げ底ぎみになっている。外面は口縁部から胴部にかけて刷毛目調整がみられ、底部にかけてはタタキがみられる。5と6は磨石である。いずれも両面を使用し、外縁と片面は敲石として併用している。石材について、5は砂岩、6は安山岩である。



第 5 图 出土物实测图(1~3 $\frac{1}{2}$, 4~6 $\frac{1}{4}$)



調査前航空写真



第2・第3調査区全景



調査風景 (その1)



調査風景 (その2)



遺物の出土状況 (土坑)



土器の出土状況 (竪穴住居跡)



鉄製の出土状況 (竪穴住居跡)



鉄製品出土状況 (竪穴住居跡)



炭化材の出土状況 (竪穴住居跡)



竪穴住居跡調査後風景

Ⅳ 山口遺跡の調査

遺跡の位置と環境

山口遺跡は、細見川の左岸、標高約18mの沖積地に位置している。細見川は国見山(1392m)の麓を源とし、さらに山々を複雑に谷を解析して流れる小河川を集めて、複雑に蛇行しながら南流し、遺跡の南東約1.3kmのところで五ヶ瀬川と合流している。

山口遺跡の立地する沖積地の堆積土壌は、すべて砂質土で一帯が細見川の氾濫による河成二次堆積層であることを示している。遺跡と河床との比高差は約3mで周辺は最近まで、大雨時にはときおり川が氾濫し付近も冠水していたらしく、わずかな降雨でも水の引きは非常に悪い状況であった。そのため現在の集落は、丘陵と平地との境(丘陵裾部)のやや高くなった箇所営まれ、沖積地の多くは水田や畑として利用されている。

周辺には、中尾原遺跡のほか山口遺跡の東側丘陵では以前から土器や石鏃が表採され、来年度の調査予定地となっている山田遺跡など知られるだけである。また、その丘陵東端には五輪塔や板碑など約50基がみつまっているほか、周辺の丘陵にもいくつか五輪塔が点在していることから、寺があったのではないかと想定されるが文献等にその「寺」の記述などは確認されていない。延岡市内においても古代～中世にかけての遺跡は、西階城や松尾城など知られるが、本格的な発掘調査例は少なく、10世紀中頃の莓田竈跡や林遺跡で掘立柱建物や陶磁器類が検出されているにすぎず、この時期の集落、墓地や土器などの生活用品など当時の生活様相についてまだ未解決の問題が多い。



第6図 周辺地形図

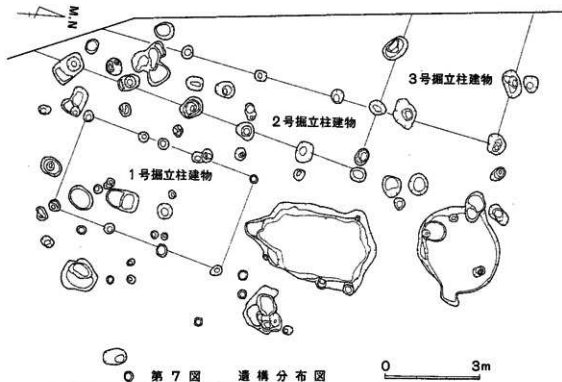
調査の概要

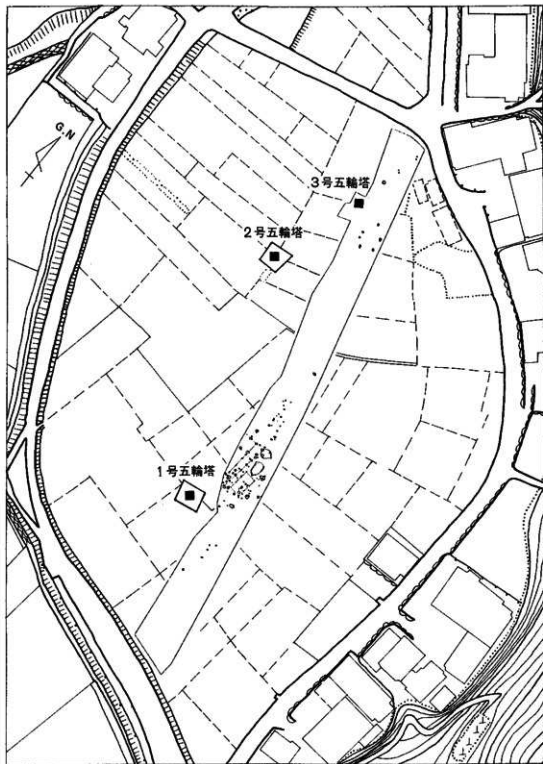
平成元年度における試掘調査によって、山口遺跡では平安時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されていた。

山口遺跡の調査は道路となる1000mについて行い、平成2年9月15日から同11月30日までの約2ヶ月半を要した。調査は、三度にもおよぶ台風の影響や秋の長雨など度重なる悪天候や五輪塔の集石箇所が三基も検出されたために予定日を大幅に遅れて終了した。

検出された遺構には、掘立柱建物跡3棟、土坑15基、五輪塔集積3箇所のほか数十個のピットなどがある。特に、2号・3号掘立柱は、2間×5間以上の大型の建物で、調査区外に延びている。五輪塔は畑に点在して検出されたが、当時の状態を復元できるものではなく、空風輪や火輪などほとんどみられないことから、数基の五輪塔を一箇所に集めたのではないかと考えられる。また、基底部には5～15cm程度の川原石が敷き詰められているが、川原石の内部や地輪の下に掘り込みや蔵骨器は検出されなかった。掘立柱建物と五輪塔との時期については不明だが、1号掘立柱建物の内部で出土した土鍋と同様のものが1号集積五輪塔の川原石縁辺からも出土していることからほぼ同時期ではないかと考えられる。

出土遺物には、古墳時代初頭の土師器、平安時代のへら切り底の杯や高台付碗、須恵器、中世では土師質の皿(糸切り)・鍋、東播磨系、備前焼、陶器、青磁、白磁、染付、土錘、滑石製石鍋などがある。古墳時代初頭の土師器は、包含層中や発掘区の南端から多量に出土しており、周囲に集落や水田が存在していた可能性が高く、中原原遺跡の生業活動(水田)の一部は細見川に面した沖積地で営まれていたと想定される。





第 8 図 発掘区および遺構分布図



1号掘立柱建物

主軸N-18°-Eをとる1間×3間の建物
中央やや右よりに土鍋が出土している。



1号五輪塔

最上部の石塔は表面に露出していた
左はしに土鍋が出土している。



調査風景

遺跡遠景



古墳時代初頭の
土師器出土状況



3号五輪塔
検出状況



上南方地区遺跡

延岡市文化財調査報告書第6集

1991年 3月

発行 延岡市教育委員会

印刷 あさひ印刷社